

コラム風

子ども若者が教えてくれたことを再考する

僕は子ども若者との出会いで3つのことを学び実践に移してきた。一つは、子ども若者が“留まり深く考える—ひきこもる—”に、未来への力を感じることに。2つ目は、この留まり深く考える—ひきこもる—に僕自身を問うこと。そして3つ目は双方向の寄り添う交流が実現し響き合っていくことです。



自宅から見たきれいな空と雲 by川辺悟史

留まり深く考える子ども若者とは、不登校や社会的ひきこもり、発達障害や虐待、暴言や暴力など家族と学校やあらゆる大人と社会状況に戸惑う子ども若者の共通する現象と理解している。

留まり深く考える—ひきこもる—は、時代に挑戦

するチャレンジャーとなる心と行動を準備している時、思春期と理解している。

僕たちの生きるこの時代は科学と経済が宇宙空間へ飛び出す勢いある時代である。飛躍的で爆発的な日々を直面し“忙しい日常を生きる”を実感する時代なのだという。

人間が火を使いこなせるまでの原初的な長大な時代を経て、火力を動力に変える劇的な産業革命の近代へ、そしてITからAIへという情報が地域社会空間を飛び越えGlobe—世界を包括する現代へたどり着いた。幸、不幸を問うよりも、その現実を前に日々生き続ける人間、それが僕たちである。Globeを支配した人間ともいえるし、同時にGlobeの破壊者ともいえる。人間による他生物の絶滅化と宇宙生命原理の解明化は、伴うプラスチックごみと核兵器と温暖化のGlobeで、めまいを引き起こす日々の時代であるとも言える。

とはいうものの僕たちの日々は、生活というシンプルな苦楽を繰り返す。Globeの人類として生き続けるため人は生活し子を育てる、脈々と続く日々を繰り返す。僕もその一人であり、日々寄り添い続ける子ども若者その親もまたその一人である。余談が過ぎました。

第1の視点、子ども若者が留まり深く考える行動力は、留まる“罪”と進む“功”という功罪の現実を迫られる一方、留まり深く考える行動力は誰も否定できない現実でもある。しかし留まり深く考えることは許されない。時計の針は進み社会は動いている。「考えすぎるな、余計なことを考えるな」と思考停止に直面する。そこで「人間は考える葦である」(ブレイズ・パスカル

17C)の哲学的問いを僕は喚起する。留まり深く考えることは人間そのものであり、人間の証明といえる。深く考え留まることの承認を社会が発信することで、子ども若者は留まり深く考えるを自己肯定でき“風にそよぐ葦”のごとく自己開示がはじまる、と実感している。自問自答の思考が他者、すなわち社会とのコミュニケーションへと広がっていくのである。長い付き合いとなっている場面緘黙の若者は僕の「話さない頑なさのスゴサ!」の感嘆の言葉に笑顔で答え、自分の拘り(手を汚さない、汚れた手で触れたくない)を説明するのだった。



吹き溜まりの楓 in 群馬

僕は子ども若者の心と行動に引き込まれ、僕自身を問い直す自分に気づくこれが第2の

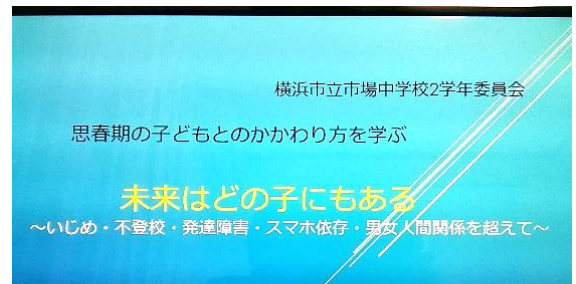
視点。自分の留まった過去や経験？ 深く考えた自分がいたのだろうか？とタイムスリップする。中学2年秋からの半年、学校へ行く道すがら友人と積極的に話さない時期があったことを思い出す。僕は一番遠くから通学し仲間が三々五々集まり学校に着くころには10人ぐらいのグループになる。3年の5月連休明け、通学路で最初に会った友人「滝田がしゃべった」、通学路で話をせず一番後ろを歩いていたそうである。苦手な教師に「レポート内容はいいけど汚い字で読めない」と指摘され傷つき、思いつくと学級会で勝手にしゃべってしまう—発言力があると誤解されていたと(笑)—思春期真っ盛りの僕を振り返り恥じる。大学5年(?) 都内アパート生活の半年余り、前年の後悔(not 留年 & 失恋)から気がついたら人との会話を避けバトと卒論の日々、未来を考えながら過去を引きずっていた。

子ども若者の留まり深く考える—ひきこもる心の内は、自分を社会をそして親や家族を思う日々であると、自分を振り返れば振り返るほど実感する。14歳から24歳まで悩ましい時期を送っていた自分を思い出し、留まり深く考える現代の子ども若者の凄さを確認する。

そして3つ目の双方向の交流に結びつくと考える。自問自答の留まり深く考える第1の世界観に、寄り添う周囲の人々が自分自身を問う第2の世界観が呼応し、双方向の承認し交流する第3の世界観に結び付く。親も他者として存在しはじめ、社会への拡がり互いの承認が実現する、思春期は留まり深く考える時期なのです。ましてこの国の民主主義は未熟で、個人の尊重、言論の自由などは成長過程なのですから。下手な解釈におつきあいください、御礼を申し上げます。そして以下に続きます…。

不登校・社会的ひきこもりを思春期現象ととらえる

今年も10回ほど不登校やひきこもりの理解、思春期の子どもとの接し方で講演する機会をいただき、約20年続けています。思春期の子どもは不安定です。親も子どもの育ちを心配し、過剰な反応で「問題行動」と誤解しがちです。良かれと思って子どもを追い込みます。子どもは一層悩み、葛藤し、混乱し、苦戦します。経済のように(実際は経済も無理なのですが)右肩上がりの子育てが可能と誤解、刷り込まれている大人なのではないでしょ



11月中学校 PTA 講演映像から

うか。あえて言えば「何を考えているのか分からない、育てにくい子」が思春期の子どもです。

Q:教育とは…訓練と従順、社会の歯車化を子に求めてきた学び方を問い直すと…

- A:①子どもの成長発達を促がすために 👉 出来ていることに注目、さらに高める
- ②子どもの個性を伸ばす 👉 特徴、優れた、好きなこと = 個性です
- ・衝動性 = 行動力・運動能力が優れている
 - ・おとなしい = 思考観察、文化的能力
 - ・刺激に反応 = 視覚聴覚が優れている
 - ・おしゃべり = 豊かなコミュニケーション
- ③子どもの苦手のケア 👉 訓練や自己啓発、憂うつさからの開放(克服ではない)
- ・反復練習や訓練からの開放 = ひらめき感情を優先、好きなことを積み上げる
 - ・誉める楽しむ喜ぶ = 行動への称賛、結果への感動(スゴイ、ヤルネ、ウレシイ)
- ④負の連鎖からの解放 👉 批判・叱責を解き放ち、出来ていることや工夫を共有
- ・失敗体験 → 行動賞賛と癒し
 - ・いじめ経験 → 理解(いじめる側の問題)と癒し
 - ・葛藤と不安 → 迷いの共感(子の不安な言葉の反復)と信頼(きっとできる)

Q:結論 思春期とは… “チャレンジャー(挑戦者)” 生まれてきた喜び

A:(1)人と生きる 協力と援助を求める

(2)自分づくり 人の役に立つ自己肯定、生まれる他者理解と人間関係

(3)自尊感情 自分を幸せにできる力の獲得 「これでいいのだ！」と言える自分

(4)自分は自分 自我形成が人への優しさを育てる

Q:思春期に向き合う…大人の具体的な応対

A:①親も子どももプライバシーは尊重する 部屋、スマホ、心の中はのぞかない。

②限りなくオープンな家の文化、家族の習慣、生活リズムをつくる。

③大人が正直に、かつ開放的である でも秘密や内緒は大切にもする。

④モノやお金で子どもの意欲をつり上げない 励ましと賞賛と結果への報償を。

⑤子どもの行為はすべて賞賛する。ほめ上手は大人づくりでもある。

⑥子どもの失敗に「何故」「どうして」を問い、改善を共に問い工夫する。

⑦家族の中で子どもに困ったら、聴く・見る・話す・触れ考え行動する大人へ。

⑧いじける、黙る、寡黙な子は、多様で豊かなコミュニケーションで応対する。

⑨怒りっぽい、暴力的な子は、冷静沈着な行動が大事。火に油を注がない。

⑩勉強しない、片付けない子は、コミュニケーションの工夫を。挑発は逆効果。

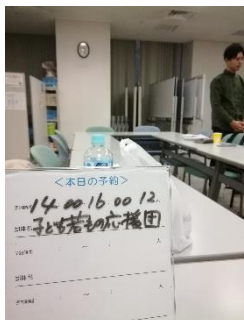
⑪皮膚感覚を大切にす 手を握る 肩を抱く ハグする ※一緒に体操でも良い

それぞれの風

○4日(日)、横須賀は産業まつり in 三笠公園 & ジャズ in どぶ板で活気を放つ一方、横須賀応援団は心揺さぶられる会議!の実現でした。

20代 Yさんは職場環境—成果主義と賃金問題—に葛藤し続ける日々を送っていることを冷静に語り自分の今後を問っていました。先月職場を少し休み考えた30代龍崎明信さんは12年務めたシステムエンジニアを来春辞め転職、NPO事業(発達障がい学習支援)への参戦を決意したことを語りました。一方地域自治会と共に6年続けてきた学習支援塾活動の高島智子さんは、同じ思いを持つ近隣の方々と来年NPO法人化する取り組みを進めていることを、希望をもって語ってくれました。

新たに参加のNさん、20年前の僕が担当だった“ゆうゆう”(学校外不登校公的教室)時代のお母さま—出会った2人の子どもたちは既に社会人に—は、30代後半長男さんの生き方への苦闘から参加、Yさん Aさん龍崎さんの発言に心を傾けながら「母親とは？」を問い続けていました。20代 AさんはYさんの同級生、しばらく社会と距離を置きその後家を出てカウンセラーの支援で“自立”にとりくみ始めています。が、「カウンセラーに信頼を置いていない…友人 Yさんがいるから今も生き続けている」と語り中学からの無二の友 Yさんに「無償の愛」を感じている、一同大いなる共感をいただいた。この友情に思わず涙した高比良和枝さん、障がいと共に生きるアマチュアピアニストの息子が紡ぐ友との交流に共鳴した。コミュニケーションが困難な息子さんと歩み、愛おしい親の思いを実感させていただいた瞬間でした。



ベテランのFさんは次の世代、子&孫への愛を、同じくIさんは40歳娘の生きる苦戦に穏やかな親の寄り添いを、T母さんは家を出た20代娘さんを「遅い」と肯定し紹介、若者たちの素直な語りに共感し称賛を感じました。長谷川ひろみさんは拘り高い息子さんのスマホ依存の日々に気をもみながら、息子さんと話し話し話し続け…親子共に夜はスマホをボックス

にしまい少し穏やかな日々が実現した歩みを語りました。涌井貴暁さん(親の介護と就活で)ら常連6人が欠席して寂しいかと思いましたが、横須賀応援団はそれぞれの生き方を交流する凄い会議でした。そしてこの11人で下のイベント決定👤です。

Jazz piano 親と子の絆 きっとつながる in 横須賀



上記の会議で話し合わせ、本研究所・横須賀応援団会議の主催イベントを実施します。音楽・パフォーマンス・トークイベントです。

ゲストは、ジャズピアニスト高比良秀一(会員)演奏、歌手山下直子さん & 演奏岩河亜希子さんのカントリー他演奏、そして書道家長谷川ひろみ(会員)の書道パフォーマンス。テーマは次の通りです。

「世の中には、いきづらさを抱えて生きる子ども達も、今、沢山います。我が子だからこそ母は苦しみ、他の子がついつい羨ましくなったりする事も。“親と子の絆 きっとつながる” でも、いつか我が子もきっと大丈夫と思える未来が来ることを信じているお母様へ、歌や演奏、そして書道パフォーマンスに乗せて応援歌をお届けします。」

☆日時 2019年3月22日(金)開場18:00 開演18:30 終演20:30

☆場所 横須賀市はまゆう会館(JR 衣笠駅下車 徒歩約8分)

☆参加費 1,000円 ※12月からチラシ(右上写真)がほぼ三浦半島に配布されます。

○逗子応援団会議は25日(日)、17人がひきこもり発信プロジェクトに参加されました。10月講演会を振り返る新舛さんの熱ある話(右写真)、「普通のこと出来る幸せ」を感じながら「不登校・ひきこもりをポジティブ、強みに」と発信。次の瞬間「体調が悪く帰ります」と正直かつ恐縮する



新舛さんを参加者は受容し、退席後は自由に交流しました。不登校を、大学中退を、ひきこもりを、作業所や交流場所や社会活動を語り、親や社会の相互理解と寄り添いを分かち合いました。後半は親たちのゆずり葉の会(橋本由美子さん:左写真)。「やっぱり来てよかった」と小田原からの母親、ひきこもる息子を受け入れる地元の母、うつ病に親子で苦しむ…など、12人(?)が語りと傾聴に心を寄せ合う一時を過ごしました。



12月予定 ○1日(土)pm1:野本三吉(加藤彰彦)さん出版記念会「街に暮らしの種子を蒔く」in 県社協 ○6日(木)am9:Largo 基金21打ち合わせ in 横浜 ○9日(日)pm2:横須賀応援団会議・マジスティック・リトルエジソン in 横須賀サポセン ○10日(月)pm3:講演会打ち合わせ in 藤沢市民活動センター ○16日(日)pm1時:逗子応援団会議・ひきこもり発信プロジェクト & 3時半:ゆずりはの会 in 逗子市市民交流センター ○19日(水)pm1時30分:鎌倉市ひきこもり自立支援会議 ○28日(金)pm6時:アンカー(教員学習サークル)in 逗子市市民交流センター ○鎌倉市教育センター:4日(火)富士塚小,7日(金)深沢小,11日(火),14日(金)大船小,18日(火),21日(金),25日(火),26日(水),27日(木) ○Largo:10日(月) ○研究所相談:13日(木),17日(月),

【発行編集:滝田衛】住所:鎌倉市七里ガ浜東2-31-12 携帯:09072124055

●メール: qq5656r9@happytown.ocn.ne.jp ●研究所ホームページ: <http://shichirigaoka-lab.jimdo.com/>

●応援団フェイスブック: <https://www.facebook.com/kodomowakamono.ouendan/>